

IV 研究成果

1 石名田木舟遺跡出土の宗教遺物について

富山県埋蔵文化財センター
橋 本 正 春

本遺跡出土の瓦塔は、卍崩し表現の高欄を廻し、初層階に阿弥陀三尊像を飾る瓦塔とまとめられる。そして、この瓦塔は、全体が復元できないながらも全国的に見て最古・最大の可能性のある瓦塔である。そして、同時に使用されたかは不明ながらも、県内初といえる大量の金属模倣仏具などの出土をみた。そこで、以下に個々の事項について判明したことについてみてみる。

1 阿弥陀三尊像

阿弥陀三尊像については、別稿に、大脇氏の考察があるので、そこで触れられなかった事柄などを中心にまとめる。

同範仏像 本遺跡出土仏像は、兵庫県三木市「正法寺山」出土の仏像の一つと同範と判明した<注12>（第5・12、図版7・14）。

「正法寺山」遺跡は、兵庫県の南に位置する三木市にあり、三木市の西で加古川左岸の丘陵沿にある。遺跡からは、仏像三点が出土し、その出土地点は神社裏の古墳もしくは経塚状の盛り上がり部分中央（発見当時すでに埋めている）から出た<注13>とのことであり、仏像は阿弥陀三尊像1体・菩薩独尊1体・坐像千体仏（上下2段10体一单位）一部破片の三様である。なかでも阿弥陀三尊像には、出土当時金箔が塗布されていたらしく、瓦塔の初層階内部にまつられたと現在では推定されている〔三木市史1970・辰馬考古資料館1982〕。

この阿弥陀三尊像の寸法を計測し比較してみると、本遺跡例は僅かに小さい。例えば、中尊台座下端から光背上端まででは4mm少なく、他の部位間の寸法でも僅かずつ少なくなる。正方寺山例の台座の整形及び表現はきれいで、特に蓮弁の表現が明確である。このような差異は、焼成時の焼き方・使用粘土・焼きしまりなどの差異により、台座などの特徴の差異は押し込まれた粘土の剥がれ方によるものである。仏像の形状などは、酷似しており同範品とする。

本県例でなく、また時期も異なり傳仏ではあるが、富山県を含む北陸地方と兵庫県（播磨）との交流を示す例があるので参考までにここに記しておく。同範例は、石川県七尾市能登町野崎の光顯寺伝世の傳仏1点（如来座像、12世紀、平安末期）と兵庫県新宮町段之上白山神社伝世品である三仏像のうちの一と同範と判明している。そして、これらの傳仏の出土状況は、珠洲地域の陶製仏像と似ており、村堂・村社の伝世などであり、広大な敷地を持つ本格的な木造建築寺院からの出土ではないらしい。ここでは、中世の使用階層と方法に共通の宗教基盤がうかがわれると〔吉岡1989〕されており、本遺跡例を考えにいれてみると、もしかするとそれ以前から同様な関係と宗教基盤があった可能性もある。そこで、これらの出土状況と同範関係地域などは、本遺跡例を考える上で参考になると思われる。

仏像制作者 制作者などについて見てみる。富山県と兵庫県とは、直線距離にして約300kmとかなり離れており、当時の仏像製作工人が自分の意思で簡単に移動して製作したとは考えがたい。しかし、移動したことを含めて、ひとまず以下の二つの可能性を検討してみることとする。

- 1 仏像製作工人が移動しない。 一ヵ所で仏像を複数個作り、それを各地に配布する。
- 2 仏像製作工人が移動する。 一ヵ所で仏像を作成した後、範のみを持って他地域に行き、再度製作する。

仏像の制作場所は、瓦塔出土遺跡近郊の須恵器窯跡が想定される。しかし、この三尊像は、瓦塔の一部として捉えな

ければならず、瓦塔全体を一ヵ所で制作した後、その大きな瓦塔を持って各地に配布したとは、考えにくい。そこで、2の仏像及び瓦塔製作工人が最もしくは製作した仏像のみを持って移動する考え方が妥当とする。

本遺跡の場合を検討してみる。近郊の須恵器生産窯跡としては、時代が異なるかもしれないが南西には福野町安居窯跡が8km離れて、南東には砺波市福山窯跡が12km離れてある。前者からは、特殊な須恵器が、後者からは瓦塔が出土しており、本遺跡出土瓦塔を生産した可能性はある。制作工人の特定は、銘文などが無いため不明である。

仏像を表現した例 本遺跡出土の仏像は、瓦塔の初層内陣箱型壁面に表現されたもので、このような例は、兵庫県正法寺山遺跡、静岡県引左郡三ヶ日町宇志山中出土例などがある。正法寺山遺跡の瓦塔は、現時点では時期は不明としておく。静岡県三ヶ日瓦塔例は、平安時代で、高さ2m2cmである（第9図、図版15）。参考例であるが、愛知県「元屋敷」例は、土製押出仏2仏並坐像を設置したと推定されており仏像の状況を示している〔梶山1989〕。瓦塔内陣の状況は、これらの例などから大脇氏の指摘のように、本格的な木造層塔と同様に内陣壁面4面に仏像を表現していたことが判る。本遺跡例は、箱形壁面にはめ込まれていたものがとれたと理解でき、全体は現時点で不明ながら、心柱を囲む箱形があったと推定できる。

内陣箱型 内陣箱型が判明した例は、静岡県三ヶ日町出土瓦塔例がよく知られており、箱形の一面の大きさは幅13cm、高さ14.6cm、厚さ0.7cmである（図版15）。仏像は、箱形の一面のほぼ中央に二体づつ表現されており、仏像の大きさは幅2.3cm、高さ7cm前後で、二体分の大きさは、幅8cm、高さ10cm前後で、一面の2/3を占める仏像はゆったりしている。ここで、三ヶ日町例が標準的な瓦塔と仮定し、本遺跡例との比較をしてみる。仏像の大きさは三ヶ日町例仏像の約二体分に近いがやや大きくなる。また、仏像を含むはめ込み型の大きさは、三ヶ日町例箱形の一面の大きさにあてはめると約3/4を占めることになり、窮屈となる。もし、三ヶ日町例と同様の作りで周辺の余白を想定すると、本遺跡例の箱形の大きさは三ヶ日町例の約1.5倍とみることができ、幅約18cm、高さ約23cm程度が想像される。

天蓋 天蓋は、仏像などの上にかけて荘厳するもので、箱形天蓋が古式とされている。本遺跡出土の阿弥陀の天蓋は、宝珠を粘土を盛り上げて表現し、三山傘で繩状の玉繫ぎの瓔珞で結び、房玉を垂下させただけの単純な形であり、博仏などでみられるような装飾性がなく、古い特徴を模倣している〔注14〕。

施無畏世願印と阿弥陀仏 施無畏世願印は、諸仏の通印で、来迎印の祖形と見られ、釈迦・薬師如来に多く見られる。施無畏・与願印阿弥陀仏の例としては、法隆寺橘夫人厨子内金堂製阿弥陀如来坐像並脇侍・同寺伝法堂乾漆阿弥陀如来坐像などが良く知られており、これらは7世紀後半から8世紀初奈良時代までの制作である。阿弥陀如来は、仏教の死後の世界である西方極楽浄土にあり、悟りに達した人のように現れた人で、衆生を救済するとされる仏である。阿弥陀仏の最古例は、法隆寺献納宝物中の金銅造阿弥陀三尊像で、施無畏・与願印を結び、両脇侍は観音と勢至菩薩で白鳳時代の作である〔注15・16〕。

年代について 同様の技法で制作された博仏などは、7世紀から制作されていること。天蓋などは、古式様相を持つこと。これらから本遺跡出土の阿弥陀三尊像自体は、8世紀初まで遡る可能性がある。

2 卍崩し高欄

高欄については、別稿で、松本氏の考察があるのでそこで取り上げたことも含めてまとめる。

高欄と卍 高欄は欄干で、廻り縁のふちに付けてその形を整え、あるいは、上下階の中間に設置してその連絡を密に

するものと説明され、本格的な木造建築物の塔や金堂などの高層階と仏壇や須弥壇などに見られるものとされている。卍は、功德・円満の意で、仏像の胸に描き吉祥万徳の相とするもので、左右両方向旋しがあると説明され、また、卍崩しは、建物の塔などに用いられるとされている。

卍崩し高欄 卍崩し高欄（第6・9～11図、図版9・15）は、本格的な木造建築物（寺院他）の塔などの二重高欄下段に見られ、飛鳥様式のみの特徴とされている。国内で、現在これが見られるのは、現存する本格的木造建築寺院と絵画などだけである。前者では、「法隆寺」五重塔と金堂と中門・「法起寺」三重塔・「法輪寺」三重塔の3寺院5建物だけであり、時期はいづれも奈良時代以前である＜注17＞。後者では、東大寺法華堂（三月堂）本尊不空絹索觀音像付隨須弥壇上縁などがあり、時期は奈良時代以後である＜注18＞。一方、国外では、韓国慶尚北道漆谷郡松林寺の金堂製仏舍利台座（新羅）〔金正基監修1988〕があり、時期は奈良時代以後である。このように飛鳥様式卍崩し高欄は、奈良時代以前の特徴でありながら奈良時代以後まで意匠が受け継がれており、飛鳥時代のみの特徴とはいえないようである。

そこで、本遺跡出土の卍崩し高欄をみてみると、本格的な木造層塔ができるだけ正確に模した瓦塔の一部だとすれば、飛鳥様式の意匠を持つことから飛鳥様式主流の時期とみることも可能である。しかし、他の瓦塔の卍崩し高欄を比較するためにみてみると、国内の現段階では、高欄を持つ瓦塔はあるものの、飛鳥様式卍崩し高欄を持つ瓦塔はまだ知られていないため、本遺跡例は瓦塔例としては国内初例であり、時期を決定しにくい。さらに、全体が不明であるため時期をここで特定することは差し控えておく。

高欄の位置 高欄の位置については、現存する本格的木造建築寺院などが初層以上でみられる。他に、松本氏などが指摘されるように東大寺法華堂例の台座など低い位置に付く例もある。しかし、本例が本格的な木造建築物の塔を目指し、できるだけ正確に製作されたとすれば、本格的木造建築寺院を模したものといえる。そして、本格的な木製塔は、基壇上に設置され、初重に縁を設けない例が多く、特に五重塔では少なく、中世以降でも古代以来の伝統を持つ塔は縁がない〔浜島正士編1979〕とされている。そこで、ここでは瓦塔の初層以上に卍崩し高欄があったと考える。また、ほぼ完全に復元されている静岡県三ヶ日や長野県菖蒲沢遺跡例などでは、初層以下の基壇上は柵状の連子が、その上の初層階以上は高欄が想定されているので、本遺跡例も同様とする。

高欄を持つ瓦塔 高欄を持つ瓦塔は、次の4例が知られている。

京都府木津「瀬後谷」遺跡例は、窯から基壇・屋蓋・高欄・相輪・露盤などが多数出土しており、一部が復元され、時期は奈良時代中頃である〔石井1992〕。高欄をみてみると、屋蓋四隅に一間づつあり、柱と架木からなり、中央部一間分を開ける。長野県塩尻市菖蒲沢遺跡では、住居跡などから瓦塔二体分が出土し、うち一体分は完全復元され、時期は8世紀中～後期頃である〔小林1991〕（図版16）。高欄は、屋蓋部上部につき、穴が一定間隔であけられている。基壇は、46～49cmの大きさで、一間約15cmの3間として中央部は開けた連子状柵が巡る。また、連子や高欄は、大部分が復元である。初層屋蓋では、一辺26cmの二間となり、一間約13cmの高欄が4面に付くものと推定されている。

このほかに、多くが高欄を差し込んでいるような痕跡があるが、本遺跡例では高欄の下部が丁寧に終わり、地覆が最下端部にあり、また、隅下端部も丁寧に終わらせており、屋蓋部に差し込んだ形跡はみられず、置かれたようである。愛知県名古屋市緑区「NN286号窯跡」例は、地覆と平桁と架木の高欄で屋根上にあり、二重高欄の下段には横連子の表現があり、東海I期で8世紀第3四半期以前若しくは中頃である。奈良県奈良市「薬師寺」例は、二彩高欄で、時代不明（寺院は飛鳥時代末創建）である。この中で、最古例は、奈良市「薬師寺」の飛鳥時代末と思われる高欄である。

年代 年代についてみると以下になる。本格的な木造建築物では、飛鳥様式は大半が白鳳期までであるものの一部が奈良時代初まで続くこと。考古遺物の瓦塔は、奈良時代初期から出現し、中頃例が多い。薬師寺二彩高欄が、類

例とすれば二彩出土寺院は飛鳥時代末創建で、本遺跡例も同様であるならば奈良時代以前とできること。本遺跡の高欄出土遺構は、7世紀末から8世紀前半でおさまる見通しであること。以上、これらを総合すると、7世紀後半白鳳時代の可能性を持ち、奈良時代初もしくは8世紀前半の飛鳥様式の卍崩し組子表現を持つ、丁寧な二重高欄とまとめられる。

3 屋蓋 屋蓋破片は、小破片が2点しか出土しておらず、全体を伺うことはできない。また、上面の瓦を表現する面が剥がれている。これから判明したことは、下面の垂木幅が1.2cm、厚さが2.4cm以上である。これらの数値は、長野県菖蒲沢遺跡例の数値に近く、これからは一辺が約50cm程度で同規模の屋蓋部の大きさが推定できる。

4 瓦塔

前述の1・2では、個別にみてきたが、ここでは瓦塔全体（組み上げて一体となると仮定）としてみてみる。

瓦塔 瓦塔は、「瓦製塔婆」の略で、「普遍性を帯びた実用型(中型)仏塔の一種で粘土を材料とし、これを木造高層塔婆に擬して造形化した上、窯で焼製して仕上げられたもの」とし、「基台をすえ、その中に中心柱を立て、軸部、屋外部を交互に積み重ね、上部に相輪を充填した瓦製の中型塔婆であり、屋外にある種の目的のもとに造立された、仏教信仰上の遺物である」と規定する。また、「木製塔の模倣物でありながら、寺院の独占的形態を離れ、実用化された中型塔婆の一として、特殊な意趣を担ったもの」と石村喜英氏が説明されている〔石村1976〕。また、大型塔と小塔について石村氏は、「その寺院における大型塔婆の性格は、釈迦の真身舍利崇拜・法身舍利(経典)信仰を意味する墳墓的性格を持つ。それに対して、瓦塔(小塔)は、塔婆信仰上は深い関わりをもちらながら、その受容層位を大半変え、相応に逸脱した形態と自利的目的のもとに、造立された。ここに瓦塔の特殊性がある。」と説明している〔石村1976〕。そして、瓦塔は、これまで仏教遺物でありながら、陶製であるため考古学の対象物として扱われ、仏教と密接に関係しながらも考古学者の多くは建築学的に、宗教学的に瓦塔をあまりよく検討していない感があった。また、考古遺物としての事実記載的な報告が多く、全体を捉え、仏教遺物としての研究は、数少なかったようである。ところが、最近の研究では、建築学の面からも検討が加えられ出し、木製の塔の一として、玉虫厨子や元興寺五重塔小塔など<注19>が考えられているのと同様に、瓦塔も木製塔の模型の一として扱われ、小建築物の一となり、多角的に研究されてきている。そして、瓦塔の研究史・性格・構造などについては、近年では松本修自・高崎光司両氏の詳しい論文などがある〔松本1983〕〔高崎1989〕。瓦塔の構造などについては、完全な例として、静岡県三ヶ日町例・東京都東村山例・長野県菖蒲沢例などがあり、これらを基礎にしてここで再度まとめてみる。瓦塔は、通常1.3m～2mの高さで、初層屋蓋の一辺が1尺6寸：48.5cm程度の重層塔形式の塔婆である。層数は5層が多く、7層例もある。一方、多層とならない瓦堂及び瓦金堂もあり、須恵質と土師質の2者がある。瓦塔は、大きく基壇・軸・斗拱(組物)・屋蓋・相輪部の5部位に分ける。それらを組むときには、基壇に中心柱を立て、基壇と軸部・屋蓋部・相輪部の順に積み重ねる。瓦塔の時期については、奈良時代から始まるとされている。

村落内寺院 瓦塔の目的や性格については、いくつかの説明がなされている。現在では、畿内などを中心とした本格的な木造建築物である寺院自体が存在する場所では仏教の信仰対象は寺院となり、それ以外の地方では瓦塔がそれにとつて変わったとみている。関東地方などでは、地方寺院のあり方として村落内寺院などを想定している〔須田1985・笛生1994〕。また、瓦塔は、木造塔の外観と、初重部分の厨子的機能を合わせ持ち、仏塔として十分機能し得たもので、伽藍建立困難地で瓦金堂とセットで、私的な集団の信仰の対象となり、陶器工人が制作し、中国や朝鮮との関係の上で考察されるものと解されている〔松本1983〕。そして地方では、中央寺院でみられるような広大な伽藍でなく、小型堂塔や瓦塔・瓦堂を安置した建物によって構成された簡略化された寺院が想定されている〔上村1991〕。そこで、本遺跡例をみてみると、もし仮に瓦塔の高さが数m近くあった場合、その瓦塔を納めた建物は相当大きくなるため、瓦塔は屋外

に直接置かれたと考えられる。参考までに奈良時代以前の仏教の塔と金堂をみてみると、塔などは寺院の中心となっており<注20>仏教の本来の塔は、現存する法隆寺などにある多層塔(奇数階：木造高層、大型塔婆)のことである。

瓦塔出土地と種類他 瓦塔の出土地及び分布状況では、全国の瓦塔を集成した飛鳥資料館の詳細な図録がある〔飛鳥資料館1984〕。しかし、その後も全国各地で相次いで出土しているので、本書では平成6年度現在で、前掲の集成に追加資料を加えて今回新たに作成した(表2)。

出土地では、28都府県、245遺跡(地点)から出ている。地域別では、東海道地域が全体の半数を占め、次いで東山道・北陸道となる。県別では、埼玉県55遺跡が最多であり、富山県では、14遺跡から出ている。出土遺跡の種類別では、廃寺・窯跡出土例が多く、国分寺例も目立つ。これらの結果は、これまでにまとめられたものとほとんど同じ内容・状況である。そして、近年の瓦塔増加は、これまでの周知遺跡内での点数の増加と周知遺跡近辺出土例であるものが多い。また、時期などもこれまでと同内容である。ここでは、仏教の畿内からの伝播と捉え、古代の道路を重視し、その沿線国(県)を一まとめとした。北陸道は、若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡国(福井・石川・富山・新潟)の7国(4県)が該当する<注21>。本遺跡例は、越中国の中でももっとも加賀よりとなる。

県内の瓦塔出土地点をみてみると、白岩川以西の県西部地区にまとまり、その中でも、富山市・高岡市南部から砺波市・小矢部市の3地点に3~4遺跡が集中する地区がある。本遺跡例を含めてほかの4地点は、点在している。

瓦塔のうちで、瓦(金)堂例があり、埼玉県甘粕山遺跡・東山遺跡・千葉県谷津遺跡の3例がある。六角形例では、福島県上人壇廃寺・愛知県猿投古窯跡があり、八角例は長野県明科廃寺例がある。初層階2間例は、長野県菖蒲沢窯跡で、専用の基壇上に設置された例として静岡県三ヶ日・滋賀県衣川廃寺(推定)・千葉県萩の原遺跡例がある。建物内出土例として、埼玉県東山遺跡、方形区画内出土例として千葉県谷津・群馬県上西原例がある。富山県内の瓦塔出土例は、表11のように14例がある。最古例は、砺波市「福山窯跡」例が知られている。中でも良く残存し、復元されているのは富山市「明神遺跡Ⅲ地区」瓦塔があげられる。県内出土の瓦塔は重層(五層)の塔を想定しており、通常の大きさらしく、窯跡出土例が多い。本遺跡例は、小破片のため全体が判然としないが、現段階では集落出土の重層例といえる。ここで、瓦塔ではないが、陶製の相輪が小杉町流岡No.19遺跡より出土しており、相輪部の大きさなどから(奈良時代)復元すると室生寺の塔と同規模になるとされている。また、No.19遺跡以外でも仏教の受容を示すものがいくつかある。そこで、時期も近く地方での仏教受容例といえ、参考となろう。

4 仏具 仏教は、飛鳥時代の538年に大陸から伝わり、国の奨励策を経て、天平時代になると国家仏教となり、特に畿内地方を中心に寺院や仏具などが盛んに作られ出す<注22>ようになる。本遺跡から出土した仏具には、奈良三彩2点などがある。奈良三彩は、分析結果から国内産奈良三彩と判明した。この三彩は、畿内から持ち込まれた可能性が高く、8世紀前半から中頃である。水瓶は、7世紀末から8世紀の第1段階の可能性がある。多嘴瓶は、8世紀中頃から後半で、東海地方とは制作方法が異なり、薬師寺西僧房跡出土灰釉陶器例に似る。合子は、8世紀第2四半期である。他に香炉・壺・鉄鉢・円面鏡破片がある。年代などについて 瓦塔と共にこれら仏具類が同時に制作されたかは不明であり、時期幅を持ち、7世紀後半から8世紀中頃までに制作され仏事に使われたと言える。

5 瓦塔他の宗教遺物のまとめ

本遺跡出土瓦塔など宗教遺物をまとめてみる。

仏像 本遺跡出土仏像は、兵庫県正法寺山遺跡例と同範と判明し、仏像の制作年代は奈良時代前半との見方がある。瓦塔の一部として見た場合、奈良時代の始め頃もしくは8世紀始めとの見方がある。そこで、ここでは8世紀前半とする。

高欄 本遺跡出土高欄は、7世紀後半の可能性を持ち、奈良時代初もしくは8世紀前半と言え、飛鳥様式卍崩し組子表現を持つ、丁寧な二重組高欄である。

瓦塔 瓦塔は、阿弥陀三尊像・高欄などから、奈良時代初頃とする。しかし、飛鳥様式を持つこと、天蓋などに古様相があることなどから、奈良時代以前の可能性もある。また一方で、仏具や須恵器などの時期が奈良時代前期以後のものがある点などから、古くせず奈良時代中頃とも考えられる。ここでは、白鳳期後半から奈良時代初頃とするにとどめる。

最古の瓦塔 最古の瓦塔は、滋賀県「衣川廃寺」の瓦塔（7世紀代）[藤沢1975]で、ついで伝神奈川県三ツ沢の瓦塔（8世紀前半）・千葉県佐倉市「長熊廃寺」の瓦塔（8世紀前半）とされている[松本1983]。本遺跡例が、8世紀前半以前の可能性があるため、国内初例と並ぶ可能性をも持つ。また、県内例では、福山窯の8世紀前半例もあり、この時期には県内に仏教が入っていると認められ、この頃にこのような宗教遺物が存在していても不自然ではない。

しかし、先にも述べているが、飛鳥様式が即座に時代を限定するものならば飛鳥時代の可能性はあるが、松本氏も指摘しているように飛鳥様式の卍崩し高欄は、後世まで残っている現実がある。そして、このような特殊な遺物が出土すると、時期を少しでも古くしするふしもあるが、ここでは飛鳥時代との明確な根拠がないので飛鳥時代とは特定しない。

最大の瓦塔 最大の瓦塔としては、長野県菖蒲沢遺跡例がある。専用の基壇上に設置されたもので、基壇下からの高さは2.3mである。ところが、本遺跡例は、菖蒲沢遺跡例より大きくなる可能性があり、筆者が推定復元した通りの高さになるとすれば本遺跡例が国内最大瓦塔となるかもしれない<注23>。しかし、すべて小破片からの復元であるので、ここでは長野県菖蒲沢遺跡例に近いとする。

仏具など 一方仏具は、それより時代が少し新しくなり、8世紀中頃とし、伝世し後世まで残った瓦塔と同時に使われたかは不明であるものの、寺院などでの仏具として使用されたものといえる。また、この瓦塔が制作された後、もしくは、相前後して仏具などが制作され、当地の氏族により支えられた、小さな地方寺院(瓦塔)を中心とする大衆をも含めた地方仏教(信仰)が行わされたとみたい。そして、この瓦塔制作及び寺院経営の協力者としては、「射水の臣」(その系列の人々)あたりが想定される。他に瓦塔の出土のあり方では、井戸などの後世の遺構出土のものと同時期と思われる遺構出土とがある。本遺跡でも同様であるが、瓦塔などと共に施釉陶器・仏具・製鉄関連のふいご羽口や鉄鋸などと同時に出土する遺跡が他地域でも注目されている。畿内周辺では、寺院跡などが多いが、畿内より遠い国では、一般集落が多くなり、特に関東では、其の傾向が顕著であり、また、建物となり得る遺構内出土例もあり、普通の一般集落内(村落内)寺院の様相を呈している。また、塔に上屋根をかけないで、塔自体を外に出したままあがめたとする説の根拠の一部になっている。

年代とまとめ 瓦塔の年代については、阿弥陀三尊像などが古い様相も持ちながら、また、遺構出土の伴出遺物に7世紀後半の遺物がありながら、国内の瓦塔の出現が7世紀後半からであることなどを考慮して、ここでは7世紀後半から8世紀初で、奈良時代以前の白鳳時代の可能性があるとまとめる。

<注12> 大脇氏の教示による。実物を計測。

<注13> 仏像発見者の黒田氏の教示

<注14> 井口氏、大脇氏などの教示による。天蓋は、先の事実記載でも述べたが、三山形・宝珠・傘骨の簡素な表現で、天蓋の古式様相であり、高欄の飛鳥様式同様に初期のものと見て良い。

<注15> 阿弥陀仏は、国内では、7世紀中頃から登場し、平安時代になり浄土教が盛んとなり、阿弥陀堂と共に各地で制作されるようになった。三尊形式では、両脇寺は觀音菩薩と勢至菩薩が多く、施無畏与願印が多い。県内例では、見返り阿弥陀仏例の福野町安居寺・光明寺蔵例

があり、桧材で室町時代の作である。平安時代の小金銅仏例では、小矢部市植生医王院裏山の宝冠阿弥陀三尊坐像と氷見市中尾の宝冠阿弥陀如来坐像があり、宝冠阿弥陀三尊形式は東北の経塚に多い<加島1991>とされている。

<注16> 土製の阿弥陀三尊像としてみると他に埠仏などがあり、それらは以下のように説明されている。官立寺院では、大繡帳により壁面を荘厳しているため埠仏の出土は少ない。一方、氏寺級寺院では、埠仏の出土が多く、これを大繡帳のかわりとして、埠仏に金箔などを塗り、寺院内の壁面を飾り、荘嚴さなどを作り出し、堂内の本尊と共に仏世界の雰囲気をかもし出していたらしい〔久野 健1979〕。

埠仏については、倉吉市立博物館真田廣幸氏から教示を受けた。埠仏や押し出し仏などは、西方淨土極樂思想の様相を表現しようとしたもので、7世紀後半からみられ、660年代の川原寺裏山の塑像と共に出土した方形三尊像埠仏が良く知られており、一辺が20cm程度である。そしてこれらを集成した図録があり詳しい〔倉吉市立博物館1990〕。押出仏は、同様に造るもので、白鳳・天平時代に限られ制作され、平安時代以降例はほとんど見られない。この埠仏は、仏像と同様に礼拝像とするものと堂塔内の壁面荘嚴具としたものがある。

このように一つの型から多数の同形品が作成されるのは、それだけの需要があり、7世紀後半から流行していた。県内出土の埠仏は、小矢部市例がある。塑像最古例をみると、648年大化4年摂津四天王寺五重塔の靈鷲山像（亀田他1991）があり、埠仏同様に7世紀後半から制作された。

<注17> 法隆寺の創建年代は、670年以後とされ、679年には金堂が、695年には五重塔などが建っている。五重塔は、方3間、高さは21.2m、方6.4mである。法起寺三重塔は、684年から造立し、706年に露盤(相輪)を作り終え、塔が完成する。高さは、23.9mである。法輪寺三重塔は、同時期である。天平建築の現存する薬師寺東塔は、730年に完成し、高さは33.63mである。

8世紀中期の738年には、海龍王寺五重小塔が完成している。元興寺極樂坊小塔は、8世紀後期奈良時代末である。室生寺五重塔は、9世紀前期平安時代初頭である。

塔は、制作材料から種類から分類されている。材料別では、木製から文字絵まで10種類があり、形などの種類では宝きょう印塔から段塔まで18分類されている。木製塔の種類では、仏舎利などの奉安を目的とする多重塔と多宝如来をまつる多宝塔に大きく分けられる。多重塔では、最大が笠置寺・興福寺四恩院の十三塔で、次いで九・七重塔がある。多宝塔では、石山寺などがある。

<注18> 東大寺は、743年天平15年聖武天皇により官の大寺として造立され、法華堂は746年頃の創立である。他に、卍崩し高欄は、「過去現在因果絵巻宮殿図」に描かれているとされている〔佐伯1936〕。

<注19> 海龍王寺五重小塔は、高さ4.14m、初重柱間77.9cm、五重は34.8cmとなり、初重の4割5部減となっている。元興寺極樂坊五重小塔は、高さ5.5m、初重柱間3間とも32.6cm、二重から1寸ずつ減らし、五重は各間20.8cmとなる。塔の相輪長さは、時代にとらわれずほぼ一定し、時代が新しくなると塔身部長さが長くなり、全体が細くなる。室生寺五重塔は、高さ16.2m、初重方2.4mである。

<注20> 飛鳥奈良時代の寺院配置は、金堂・塔・講堂・門が主で、地方では、全建物を建ててすます。

また、寺院としては、塔の他に金堂などの建物と回廊などが一体となっている。そして、特に奈良時代以前の寺院は、全て桧材で建立され、それ以後の寺院でも桧材が多い。このように寺院全体を桧材で作らるべきがあったとすれば、一地方の氏族が広大な寺院を建立するだけの財力が無かったと見るのが妥当であろう。そして、これらのことなどから、広大な寺院のかわりに瓦塔を中心とした小寺院(瓦塔の上屋根程度牡もしくは、瓦塔自体を現地に置いて信仰したとみれる。

<注21> 国郡制は、大化改新の詔からはじまり、郡司級の氏族は地方の中心的仏教受容者であったので、本遺跡出土の瓦塔を支えた人々を考える上での参考となる。

<注22> 仏教仏具は、仏具・法具・僧具などに大きく分かれ、金・銀・銅(白銅・青銅・黄銅など)製品が多い。飛鳥時代例として、法隆寺金堂内仏像と天蓋などが、天平時代例としては東大寺法華堂(三月堂)内陣などが知られている。厨子(宮殿)は、仏像や仏舎利・仏画・經典などを納置するもので、仏像安置・仏画奉懸・納經・舎利厨子がある。同様意味で厨子の一種としては、仏龕がある。仏教版画は、仏教の伝来以後、他の仏具や堂塔などと同様に発展し、仏などが彫り、刷られ、仏教の布教と堂塔内の荘嚴具の一として用いられている。本遺跡では、この中の仏具と法具の一部が出土したことになる。

<注23> 瓦塔の大きさを推定復元してみる。ここで本遺跡例の瓦塔全体を推定復元して見る。また、高欄は飛鳥様式卍崩しであることと本来の塔を目指しできるだけ正確に模しているはずであるので、卍崩し高欄を持つ法隆寺を基準としてみる。本遺跡の高欄の柱高さが7.8cmで、高さと一間の長さ比率が本格的木造層塔をまねており1対2とすると15.2cmの一間が想定でき、二間なら約30cm、三間なら約45cmとなる。三間の時の屋根の張り出しを考えると基壇一辺長は約90cm近くになり、二間の時は約60cmが予想される。軸部は、内陣箱形が幅約18cm、高さ約23cm程度とするなら、初重一辺は約36cmで高欄などを含めて約54cm程度である。法隆寺の高欄は、三間が四方に巡るので、本遺跡例も同様とすると一間は約15cmと推定され、高欄の三間一辺の大きさは、約45cmと推定復元される。屋蓋などの規模は、初層が54cm程度(約2尺)となり、五層とした時の五層一辺は27cm(約1尺)程度となる。相輪部は、不明であるもののほぼ全部の瓦塔にあったとみられるので、相輪を含めた高さは平面初重柱間全体の約5倍であり、五層とすると相輪を含めた高さが3m近くなる可能性がある。一方、出土破片の復元から高欄一間長は柱長の2倍を越える可能性もあり、本来の塔の1/10模型の小塔に近い規模となる可能性もある。

ここで本遺跡例と菖蒲沢遺跡例との比較をする。菖蒲沢の高欄一間は10.7cmで、二間約22cmである。二間の時の比較では、本遺跡例が二間約30cmであり、菖蒲沢の約1.5倍となりそうで、三間では約45cmであるため2倍強となる。また、高欄の柱径では、菖蒲沢が0.7cm角で、本遺跡例が1cm角であり、ここでも規模が大きいようである。